上水内教育会のあゆみ

上水内教育会　略沿革

一八八〇（明治13）年	上水内教育会の設立
一八八四（明治17）年	長野教育談会設立（長野町）→長野教育会に改称
一八八五（明治18）年	上水内教育談会設立
	山陰部教育会設立
	西部教育会設立
一八八六（明治19）年	山陰部教育談話会設立
	長野東部教育会設立
	信濃教育会創立
一八八八（明治21）年	上水内郡教育会設立
一八九三（明治26）年	北部教育会設立
一八九五（明治28）年	五地区教育会となる（北部・平坦部・平坦部東部・山陰部・西部）
一八九七（明治30）年	郡夏期講習会（長野県師範学校）
	上水内郡から長野市発足
一九〇〇（明治33）年	信濃教育会上水内部会発会
一九〇八（明治41）年	「上水内郡誌」（県下初の郡誌）刊行
一九二〇（大正9）年	戸隠夏期大学開講
	上水内郡史料展覧会
一九二三（大正12）年	吉田町・三輪村・芹田村・古牧村が長野市へ編入
一九二四（大正13）年	林間夏期大学
	「上水内郡及長野市史料写真帳」刊行
一九三三（昭和8）年	「戸隠郷土調査概要」刊行
一九三六（昭和11）年	上水内教員互助会設立
一九三七（昭和12）年	「一茶句抄」刊行
一九四二（昭和17）年	「上水内教育会沿革史」・「黒姫山」刊行
一九四七（昭和22）年	上水内教育会発足
一九五〇（昭和25）年	野尻湖夏季大学開講
一九五三（昭和28）年	会誌「上水内教育」創刊
	「上水内の自然と人文」刊行
一九五四（昭和29）年	上水内教育会館落成
	平坦部支会が長野市に編入
	「会報」創刊
一九五五（昭和30）年	南部教育会が分離独立総会
一九五八（昭和33）年	「上水内郡地質誌」・「上水内郡地質図」刊行
一九五九（昭和34）年	「八木文庫」設置
一九六六（昭和41）年	重松鷹泰講演会（以後、毎年開催）
一九七〇（昭和45）年	「上水内郡誌・自然編」刊行
一九七六（昭和51）年	「上水内郡誌・歴史編」刊行
一九七八（昭和53）年	第1回郡臨地講習会
	第1回郡教育懇談会
一九七九（昭和54）年	「上水内郡誌・現代編」刊行
一九八三（昭和58）年	教育会館建設30周年記念総会で片岡仁志講演
一九八九（平成元）年	「上水内教育会史」発刊
一九九三（平成5）年	「歩み続けむ」重松鷹泰講演集の発刊
一九九九（平成11）年	新教育会館の竣工
	野尻湖夏季大学50周年記念
二〇〇五（平成17）年	市町村合併で郡内の豊野町・戸隠村・鬼無里村が長野市に編入
二〇〇九（平成21）年	合併契約締結式
二〇一〇（平成22）年	会誌『上水内教育』第92号（最終号）刊行

旧上水内教育会館

上水内教育会館

上水内教育の特色・伝統

1　自然や文化

上水内郡の地形をわかりやすく説明するのに、手の指と手のひらになぞらえて「五指一拳」（ごしいっけん）と言われた時期があった。五本の指は、東部（豊野町・三水村・牟礼村）・北部（信濃町）・中部（鬼無里村・戸隠村）・西部（小川村・中条村）・南部（信州新町）地区を指し、その指の間は鳥居川・裾花川・土尻川・犀川を示し・手のひらは平担部を指すといううまい表現をした。今は市町村合併で、形も変わってしまった。飯綱山・戸隠連山・黒姫山・虫倉山や黒姫高原に野尻湖などの自然も豊かで、戸隠神社・一茶の生家や土蔵などの文化遺産も残っている。彫刻家北村や和算家寺島宗伴も忘れてはいけない。

寺島　宗伴
(1794-1884)
和算家

北村　四海
(1871-1927)
彫刻家

北村　正信
(1890-1980)
彫刻家(四海の養子)

2　一茶に因んで

一茶は、江戸後期に信濃町柏原で生まれたが、家庭の事情で江戸に奉公にでる。そこでいろいろな人々との出会いにより、俳諧を志すようになり、古典を読んだり行脚にでたりして猛勉強をする。最後はふるさと柏原にもどって近隣の弟子たちに俳句の指導などするが、生涯に詠んだ俳句は２万句を超えるというから驚きである。因みに、芭蕉が生涯に詠んだ俳句は１７００句余りだというから、その桁違いのすごさが分かる。

3　一茶の俳句は、子どもにとても親しみやすい

一茶の俳句は、その生まれや育ちにも影響されているといわれるが、雀や蛙などの小動物がたくさんでてきたり、思ったことを率直に表現したりしているので、そんな感じになるのかも知れない。

小さいものや虐げられている人たちへの温かな眼差しもいい。

小林　一茶
(1763-1827)

「花のかげ　赤の他人は　なかりけり」は被差別部落民への共感を詠っている句だが、一茶の広く深い心に打たれる。

上水内では、子どもたちが郷土の俳人一茶に倣って、俳句の学習にも取り組んで感性をより豊かにしようと頑張っている。

4　重松先生に因んで

重松先生は、長年にわたり信州の各地で学習指導の指導者として入信された方である。

重松　鷹泰
(1908-1995)
教育学者

先生の信条は「初めに子どもありき」であり、「初めに論ありき」に傾きがちな信州の教師に対して、柔らかな、しかし、厳しい提言・指導を終始され続けた。研究授業の折りも、教室の後ろではなく前から子どもの表情と雰囲気をつぶさに漏らさず感得され、授業研究会では授業の流れを変えた「あの子のあの発言・表情」を適切に示され、上水内の子どもや教師、また、自然をこよなく愛され、ご自身の最期も信州であった。

重松先生の生涯を「菩薩道の歩み」と称された人がいるが、正しくそうであった。

ひとこと

①自然を大事にし、自然に学ぶ教育実践を追求し今も続けている教育会といえよう。具体的には、スキーやカヌーなど、その地でしかできない地域の特色を生かしての教育学習や道徳、それを普段の生活にも採り入れ、河川や湖沼のクリーン作戦など現代的課題としての課題問題にも目を向け行動している。

例年実施している臨地講習会一つをとってみても、自然に恵まれた地域の人々が、地域の自然に誇りをもって生活している事実を、教育会としてもしっかりと認識し、共に考えていこうとする姿勢を示している証左ともいえよう。この見識と実践に見習いたい。

②子どもの側に立った学習指導を追求してきた教育会といえるであろう。重松鷹泰の存在と指導は大きいが、哲学を尊重する教育会の気風や、また、人間同士が温かく助け合って生きている地域の風土とも無縁ではない。ひとりひとりの子どもを大切にするという教育の原点は、時代を超えた普遍性をもち、昨今、郡内で推進されようとしている小中一貫教育にも通じているように思われる。

③教師のバックボーンとなる哲学を大事にしてきたことは、物事の本質を深く追求しようとする会員と教育会の精神の表れであり、上水内教育会の特色の一つといえよう。野尻湖夏季大学や哲学講演会で招聘する講師の高潔な人格に触れつつ哲学を実践的に学び、かつ、講演記録集を発刊し、郡の教育に通底する精神を現会員をはじめ後世に伝えようとする熱意に学びたい。

出典：上水内教育　第92号（平成22年2月発行）